

●平成28年度一般前期試験(英語)講評

ねらい

大学で求められる基本的な学力を試すことを念頭に、センター試験とは異なる視点で総合的な英語力を問う。具体的には、長文の内容を素早く読み取り、その要点を日本語・英語で簡潔に表現する力や、未知の語彙を文脈の中で推測する力、自分の考えを英語で論理的に表現する力を試すことをねらいとしている。

【1】

全体講評

「ねらい」にある「要点を日本語・英語で簡潔に表現する力や、未知の語彙を文脈の中で推測する力」を試す問題に加えて、文法・構文理解を試す問題も含まれている。毎年、記述式の問題に対する正答率が極端に低いので、その種の問題の正答率を上げることで全体の点数アップが可能となる。記述式問題に対する解答作成においては、英文を理解する読解力のみならず、日本語力や文章作成能力も必要とされる。短期間で養える力ではないので、日頃の学習を大切にして、継続した学習を通して養って頂きたい。

解答の中で、「解答に書かれている日本語の意味」がよく理解できないもの（日本語の主語と述語の繋がりが不明瞭な解答；日本語で解答をしてはいるが、問題文の英文を直訳しているような解答）が散見された。日本語で解答を行う時は、答案に書いた自分の日本語を再度読み直して、主語と述語のつながりがおかしくないか、修飾語の位置がおかしくないか等の確認をしっかりと行うようにすることが必要だ。

日本の教育に関する時事的な内容の英文であった。受験生には日頃から新聞報道やテレビ報道などに興味を持って接して欲しい。

また、内容を日本語でまとめて解答する形式の問題で一部字数制限を設けた。内容を考える際大まかな分量の目安となることを意図したつもりであったが、受験生には却って解答の自由度を失ったような解答状況だった。日常的に英語でも日本語でも読み取った内容を素早く簡潔にまとめる練習が必要だ。

各設問について

問1は、動詞 submit の目的語を答える問題であるが、半数近くの受験生が不正解であった。日本語で意味を考えれば簡単な問題である。多くの不正解者は proposal の後の that 節の英文のみ記述していた。

問2は、字数制限があるが、This が it will be given the status as a formal subject の部分を指し示していることが分かり、it が ethics を指すことが分かれば、解答できたはずである。正答率は低かった。読み始めてすぐに解答しようとするのが難しく感じるかもしれないが、このような問題は全体を読み通したのちに考えると何が問われているのかが、おぼろげながらも分かってくるはずである。

問3も、字数制限が設けられている内容把握問題である。on grounds that ~（～を根拠として）というのが捉えられれば、解答できる。問2と同様に正答率は低かった。

問4は、ほとんどの受験生が解答できていた。

問5は、But will making ethics a formal subject really help nurture diverse values? という疑問文に対して、the opposite effect を懸念しているということを理解できるかが鍵である。字数制限が設けられていて、問2、問3と同様に正答率は低かった。

問6は、state-compiledが入っている段落と次の段落をよく読めば解答できる問題であるが、半数近くの受験生が2つのうち一つしか解答できていなかった。

問7は、ほとんどの受験生が不正解であった。単語を暗記する際に usage を踏まえて be focused on 動詞 ing + 目的語 + to 不定詞という連語'として学習する必要がある。

問8は、flaws の同意語を求めた。defects が正解だが、この語が分からないとしても、文脈から消去法で正解にたどり着ける。まず文脈中で flaws を読み取ること。正答率は3割程度であった。

問9は、どういう collection なのか、その内容を日本語で説明することを求めた問題である。答えとしては、その直後にある、sayings and biographies of great historical figures like Kinjiro Ninomiya を中心に述べると良い。biographies を「生物学」や「生態学」と訳す間違いが極めて目立った。ちなみに、「伝記」と「自伝」は意味が異なるので、注意してほしい。また、ここで figures を「石像、フィギュア」と訳すのは不自然である。二宮金次郎を漢字で書けない受験生がいても仕方の無いことかもしれないが、「偉人」という漢字が書けない受験生も目立った。完全正解は受験生の2割以下であった。

問10は、the problem の内容を30字以内の日本語で説明することを求めた問題である。字数に制限があるが、できる限り正確に、かつ、丁寧に説明するのが解答のコツである。その直前の段落にある great differences exist in views and stances among schools and teachers concerning ethics を中心に述べると良い。ここでも great が使われているが、差や違いが大きい状態を意味する形容詞である。stances を「スタンス」と訳しても、本当に意味を理解しているのか伝わらない。また、between でなく among が用いられていることから、「大きな差」は「学校と教師の2者間」にあるのではなく、「学校毎に違ったり、教師によっても違ったり」という状況を表していることが分かる。school を「生徒」と訳している受験生が多かった。concerning は「～については、関しては」という意味の(動詞から派生した)前置詞である。この記事は平成26年10月の報道等でも話題になった道徳の教科化についてである。社会の動きに関心がある受験生は記憶にあるだろう。ethics が何か知らなくても、最初の英文で小中学校について触れているので、受験生は自分自身が受けてきた科目を思い出しながら、本文の内容から「道徳」であると分かるだろう。完全正解は受験生の2割以下であった。

問11は、主語は What is really important である。この what は疑問詞ではなく関係代名詞なので、「何が」と訳さないこと。それに続く not A but B (AではなくてBだ) を not only A but also B (AだけでなくBも) と勘違いして訳した答案が目立った。このAの部分にある formalization は「正規化、正式なものにすること」という意味で、ここでの「(道徳の)教科化」を表した単語である。Bの部分にある content は「内容、中身」という意味である。contain と混同している受験生が目立った。education の直後にある「コンマ+or」は「または、もしくは」という意味ではない。「つまり、すなわち」という

言い換えの機能を果たしている。言い換えをきちんと訳せるか否かで、完全正解か否かが分かれた。完全正解は受験生の1割以下であった。is actually taught を「実際に教えられた」と過去時制で訳している受験生も多かった。時制は現在である。また、taught と thought を混同している受験生も目立った。基礎的な英語力を身につけた上で受験の準備をして頂きたい。

問12は、最後の debate に関しては、ほとんどの受験生が解答できていたが、最初の addressing に関しては、半数以上の受験生が不正解であった。この段落の一文目の call for が理解できていれば容易な問題である。

問13は、正答率80%以上で、よくできていた。

【Ⅱ】

全体講評

この読解問題は、英問英答問題が5問、和訳が2問といういたってシンプルなものである。しかし、今年度の問題では、今まで以上にⅡの英文とⅢの英作文（エッセイ）を関連させている。Ⅱの英文の深い理解があると、Ⅲの英作文（エッセイ）が書きやすくなる。Ⅱの英文の必要な部分は引用符をつけて、エッセイに活かすこともできる。

Ⅲの英作文（エッセイ）の指示文からⅡの英文が「高コンテクスト文化と低コンテクスト文化」であることが分かる。Ⅲの英作文（エッセイ）の指示文を参考にすることで、英文の理解が容易になる。

今後もこのような深い関連をもたせた問題になるかどうかは分からないが、読解問題が英作文問題と何らかの関連性がある可能性は大きい。

各設問について

設問1の1～5のうち、1, 3, 4, 5に関しては、ほとんどの受験生は正しい解答ができていた。但し、2に関しては、問題文中の how does “context” affect communication を正しく理解できていれば容易に解答できる問題である。半数近くの受験生は low-context cultures の説明に関する内容を記述していた。

設問2は、和訳であった。正答率は⑦が6割程度、⑧が8割程度だった。

⑦について、be applied to ～（～に応用される）の解釈を「応募する」としている解答があった。多義語は文脈の中で捉える必要がある。

⑧について、文章構造の捉え方を間違っている学生がいた。Beyond の目的語は similarities までであるのに、differences までで切っている解答があった。exist を exit と間違った答案もあった。

【Ⅲ】

全体講評

大学入学後に必要となる英文構成法に基づいて、論拠・理由を示しながら自分の考えを論理的に英語で表現できるかを試した。

今年度から語数を500語程度に増やした。パラグラフ構成を考えると、それくらいの分

量がなければ書けないと判断した結果である。しかし、例年出題している形式の問題であるので、対策はやり易いはずである。今回も昨年と同じように、(A)明確な構成を持った、複数のパラグラフから成る短いエッセイを書くこと、そして、(B)問題Ⅱの英文内容を基にして書くこと、を要求した問題となっている。

今年度は、テーマ「日本人にとって異文化間コミュニケーションを成功に導くにはどうすればよいか」という対処法について、問題Ⅱに踏み込んだ3つの観点を示し、問題Ⅱを読みながらそれぞれの観点から解答を書くとうまくパラグラフ構成ができるように、問題を工夫した。

1つ目の観点は、「高コンテクスト文化と低コンテクスト文化の違い」を問題Ⅱに即して説明する。その説明から、2つ目の観点「日本はどちらの文化に属するのか」について理由を示して判断する。次に、2つの文化体系の違いから生ずるコミュニケーションの困難点を考える。この3つの内容を前提に「異文化間コミュニケーション」における上手な対処法を考え提案する。結論部分は以上のまとめ。以上のような構成で作成すると、英文エッセイはほぼ完成する。

対策法としては、(1)日頃から（日本語や英語の文章を）読むこと、(2)読んだ内容に対して（批判的に）考えること、(3)読んで感じたこと・考えたことを書くこと、を習慣化することである。これによって読解力や分析力が深まり、入試対策のみならず、深みのある学力（あるいは教養）が養えると期待される。高校の英作文の教科書は非常に良くできているので、英文を書く際参考にし、英語の文章構成を理解し、それに則って何度も小論文を書く練習をするとよい。

答案作成についての講評

問題Ⅱに踏み込んだ3つの観点のうちいくつかを取り上げては書いてあったが、3つすべてを踏まえたものが少なかった。解答欄すべてを使い切った答案がある一方で、作文量の少ない解答も多かった。また、問題Ⅱは高コンテクスト文化と低コンテクスト文化についての内容であったが、2つ目の観点「日本はどちらの文化に属するのか」について、逆の解釈をしている学生が多かった。つまり、日本は低コンテクスト文化に属すると考えている学生が多数見られたが、日本は高コンテクスト文化に属する。

書き方や構成については問題文に具体的に指示があるので、それに従って書くことが肝要である。ただ、いきなり書き始めるのではなく、まず、全体の流れ・概略（アウトライン）を考えること。それに基づいて書き終えたら、スペルミスがないか、文法（特に動詞の時制、主語との数の一致など）に誤りがないか、そして求められていることに対する確かな内容のエッセイになっているか、という点をチェックしながら推敲して頂きたい。